であらう。世人が彼れの教說を科學の永續的財產として維持し得るかどうかは兎も角として、彼は到るところにおいて、獨逸精神生活の一人の最も强き建言者であり、主動者であつた。彼はその獨自的なる、遂に逆說に陷るところまで突進し、その流轉的なる、遂に自己撞着に陷るとこまで突進せずには居られぬやうな思想家であつた。彼はまた世の多くの人達のやうに、たゞ正しきを守らうとした人ではなくて、寧ろ眞理を求め求めて、それゆゑに、今迄懷く自己の思想を顧みないだけではなく、進んでそれを放棄するのむも意とせやうな人である。さうして彼れの反對者には屢々矛盾と見える此內的生動性こそは、我等に取つて此思想家を他の誰れにも增して、崇めさせる所以のものと思はれる（一千九百二十八年五月三十日）

マツクスシエーラア教授は本月十九日に急病にて死去されました。ハイデガー教授はそのために二十一日に大學にての平素の講義の時間最初の十五分を割きて、氏の爲に吊ひの講演をされた。氏の訃はハイデガー教授にとりても精神的には餘程の痛苦でありしと見え、この日は特に黑服を着し、講演中にも顏色赤く、眼濕ひ、額の靜脈一段の隆起を見受けました。五月二十七日

マールブルヒ　伊藤　猷典

彙報

哲學茶話會

六月十日（日曜日）樂友會館階上にて西田教授講義終了を紀念して集會、晩餐を共にし田邊教授の、袂別の辭並に發聲にて乾杯す。夜氣未だ冷かにして、轉た寂しきものあり。西田教授懷舊の辭ありて會を閉ぢ。

寄贈圖書（昭和三年五月—六月）

最近寄贈せられたる著書について、左に内容を紹介す。詳細なる批評又は紹介は別の機會を期す。

小乘佛教概論　高井觀海著　京都藤井文政堂發行

小乘教は現在教派として勢力はないが、大乘教研究には必ず小乘異部を研究する必要ありといふ見解よりして、佛滅後、二百年頃小乘教が上座部、大衆部の二部に分裂したる時より、筆を起して、二部各々分裂に分裂を重ね、所謂大衆九部、上座十一部に分れたる顚末、並びに各部の教理を宇宙論と宗教論とに項を分つて組織的に説明したものであつて、記述は「異部宗輪論」、「文殊師利問經」「大毘婆娑論」等の漢譯佛典を主たる原據としてある。

巻末には「異部宗輪論」本文を異譯と對照して附錄として添へてある。

佛教人文主義　シルヴン・レヴイー著　山田龍城譯　大雄閣發行

コレージュ＝ド＝フランス教授で、我が帝國學士院客員たるシルヴン・レヴイー氏の論文六篇を譯出したものである。

一、印度と世界
二、佛教人文主義
三、波羅門文明
四、佛教文明
五、東洋と西洋（人文主義の小編）
六、東方人文主義

博士が約二年間我が國に滯在せられ、今や故國へ歸られんとするに當つて佛教又は印度の文明に對する同情あり理解深き評論を置土産にされたと見る事ができるであらう。

日本政教の根本問題（國體原論）　安岡正篤著　金鷄學院刊行

金鷄文叢第二册として、國體及び政治に關する世人の疑問五條をあげて、簡明に解かうとしたものである。その五條とは

一、國家は何が故に尊きや。
二、爲政者と民衆との本質的關係如何。
三、天皇は何が故に神聖不可侵なりや。
四、萬世一系の皇統が何故至貴至尊なりや。
五、今日世界は次第に君主國變じて共和國となり、而して是れ實に世界共通の政治的進歩とされるのに、日本獨り天皇政治を清標し得るものなりや。

寄贈雜誌新聞（昭和三年五月—六月）

哲學雜誌	昭和三年五月	第四九五號
丁酉倫理會倫理講演集	同　六月	第三〇八號
東亞の光	同　四月	第廿三卷第三號

哲學研究　第百四十八號

支那學	同五月	第四卷第四號
眞宗研究	同五月	第十一號
生理學研究	同四月	第五卷第四號
哲學青年	同五月	第一卷第七號
同	同六月	第一卷第八號
教育心理研究	同五月	第三卷第五號
全人	同六月	第二二號
觀想	同四月	第四八號
社會學徒	同五月	第二卷第五號
帝都教育	同五月	第二七八號
靜岡縣教育	同五月	第三七三號
信濃教育	同五月	第四九九號
Psiko	同四月	第一號
奈良縣教育	同五月	第一八二號

帝國大學新聞　昭和三年五月十四日、廿一日、廿八日、六月四日、十一日